

令和 3 年 6 月 26 日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K04542

研究課題名(和文)大工頭中井家伝来「茶室起こし絵図」の建築史的研究と展示公開

研究課題名(英文) A study on the architectural history of "Tea-ceremony room Okoshi-ezu (miniature architectural papercraft)" inherited by the Nakai family of head carpenters, and its exhibition

研究代表者

谷 直樹 (Tani, Naoki)

大阪市立大学・大学院生活科学研究科・名誉教授

研究者番号：40159025

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：江戸時代に京都大工頭を世襲した中井家所蔵の重要文化財「大工頭中井家関係資料」の指図・絵図類に数寄屋関係の資料が含まれており、45点の「茶室起こし絵図」がある。中井家本「茶室起こし絵図」は、京都大工頭の中井家に伝来すること、一部は製作年代や注文者が判明すること、中井役所の棟梁衆が起こし絵図の製作に関与していること、現地調査をした野帳が一部残っていること、中井家の当主は茶人として名を残していること、近年の保存修理によって製作技術を示すデータが蓄積されていることなど、他の茶室起こし絵図と比べると来歴が明確で貴重な資料であることが分かり、大阪市立住まいのミュージアムの展覧会で公開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果は、建築史にとどまらず、茶道史、近世文化史などの研究分野に貢献できる。また、博物館や美術館で「茶室起こし絵図」をテーマにした展覧会を開催する基礎資料になる。茶室を含む「起こし絵図」を、和紙の建築模型(日本製ペーパークラフト)として情報発信すれば、日本人のみならず、インバウンドを含む海外への日本文化紹介にも寄与できる。

研究成果の概要(英文)：Important cultural property "The Materials related to the Nakai Family of Head Carpenters" is a collection inherited by the Nakai family during the Edo period. Among the plans and drawings in the collection are 45 drawings of "Tea-ceremony room Okoshi-ezu". These drawings have the following features. It was inherited by the head carpenter's family in Kyoto. The date of manufacture and the person who ordered it are known for some of them. The master carpenters of the Nakai government office were involved in the production of the drawing. Some of the field books that surveyed the site of the tea-ceremony room have been preserved. The Nakai family is known as a tea master. Recent conservation and repair work has accumulated data on production techniques. As a result, it was found that Okoshi-ezu inherited by the Nakai family have a clearer history and are valuable materials compared to other Okoshi-ezu, and an exhibition was held at the Osaka Museum of Housing and Living.

研究分野：建築史

キーワード：茶室 起こし絵図 大工頭中井家 中井役所

## 1. 研究開始当初の背景

起こし絵図は「建物の図法」の一種。台紙に平面図を描き、それに各壁面の内外を描いた図を貼付け、それらを起こし建てることによって、建物の立体的な組み立てが容易に理解できるように工夫された図面(『茶道辞典』)と説明されている。茶室起こし絵図は、小空間に複雑な立体的構成を展開する茶室を表現するのに適切であったことから、茶人の中で愛好されてきた。

茶室の研究は堀口捨己の『利休の茶室』(1968)や『茶室研究』(1969)、中村昌生の『茶室の研究』(1971)があり、中村利則、日向進などの研究へと続いている。茶室起こし絵図については、1963年に墨水書房から『茶室起こし絵図集』(堀口捨己監修)の刊行が開始された。これは松平家旧蔵本(東京国立博物館所蔵。以下、東博本とする)の50組を精密な複製に仕立て、堀口捨己、稲垣栄三、中村昌生が解説を加えたもので、同書の刊行を機に茶室起こし絵図の存在が世に知られることになった。東博本については、『茶室起こし絵図の魅力』(福井工業大学編、中村昌生ほか執筆、2005)が刊行され、最近は、加藤悠希の「松平定信(楽翁)収集とされる茶室起こし絵図について」(『建築史学』65号、2015)が発表されて総合的な研究の必要性が述べられている。

## 2. 研究の目的

茶室起こし絵図はこれまで東博本(松平家旧蔵本)が知られているが、本研究は江戸時代に京都大工頭であった中井家伝来の「茶室起こし絵図」(以下、中井家本とする)を取り上げ、建築史的な検討を行うことが目的である。中井家本は、研究代表者が編集した『大工頭中井家建築指図集—中井家所蔵本』(思文閣出版刊、2003。以下、絵図に表記した\*印の数字は本書の番号)の「数寄屋建築指図」に、茶室起こし絵図45点の写真と基本データを収録している(茶室起こし絵図の図版解説は新谷昭夫)。中井家関係の建築絵図は2011年に他の文書や器物とともに「大工頭中井家関係資料」(5,195点)の名称で重要文化財に指定され、大阪市立住まいのミュージアム(大阪くらしの今昔館)に寄託・保管されている。本研究の成果を同館の特別展で公開するのも目的の一つである。

## 3. 研究の方法

本研究は、中井家本「茶室起こし絵図」を取り上げ、他の茶室起こし絵図の情報も収集して、課題①～⑥を設定して考察を加え、その価値を明らかにする。

- |                    |                       |
|--------------------|-----------------------|
| ① 中井家本「茶室起こし絵図」の価値 | ② 中井家本「茶室起こし絵図」の製作と技法 |
| ③ 失われた茶室・数寄屋の復元    | ④ 中井役所の棟梁と「茶室起こし絵図」   |
| ⑤ 茶人としての中井家歴代当主    | ⑥ 「茶室起こし絵図」展の開催       |

本研究では、中井家本の現状を記録し、また「大工頭中井家関係資料」の文書・記録や書画など関連する基礎的な資料を収集する。さらに、国庫補助により2013年度から継続している「大工頭中井家関係資料」の保存修理事業の中で、現在までに「茶室起こし絵図」17点の修理が完了しており、本研究はこの保存修理による新しい知見も取り入れている。

## 4. 研究成果

### (1) 中井家本「茶室起こし絵図」の価値

茶室起こし絵図に関する文献を調べると、近衛家熙(1667—1736)からの聞き書きを山科道安(1677—1746)がまとめた『槐記』享保13年(1728)2月12日条に、「常修院様ノ御園居ノ図ヲ出シテ、御見セナサル、四畳ニ台目ノ畳アルモノナリ、厚紙ニテ合紋アリテ、屋ハナシニ立ラル、ヤウニシタルモノナリ、是ハ中井常覚ニ云付テサセテ貰ヒタリト仰ラル」との記事がある。家熙は、常修院(天台座主の梶井宮慈胤法親王、1617—1700)の四畳台目の園居(囲、茶室)を、中井常覚、すなわち中井正知(法名・浄覚、1631—1715)に依頼して絵図に仕立てさせている。その絵図は、厚紙を用いて合紋によって組み立て、屋根はないと書いている。これは茶室の起こし絵図のことで、当時京都の公家社会で需要があり、中井家が注文を受けて製作していたことが分かる。

中井家本「茶室起こし絵図」の中に年代や製作事情を記したものがある。最古のものは元禄16年(1703)の「大徳寺高林庵園建地割」(378\*)である。また宝永7年(1710)に上洛した儒学者の新井白石は、「妙心寺靈雲院小座敷建地割」(489\*)を所望し、中井役所の棟梁である堀内元右衛門が京都所司代の松平信庸の所に持参し、用人の安達喜兵衛に手渡している。さらに翌年には「北野養命坊小座敷建指図」(458\*)の製作を依頼している。その後、水野忠之(京都所司代、後に老中)は享保3年(1718)に「伏見奉行屋敷小座敷建地割」(464\*)を、享保7年には「鹿苑寺茶屋建地割」(407\*)を所望し、中井家が製作している。また同年に本多忠統(後に若年寄)の所望による「不審庵座敷図」(368\*)を、寛延3年(1750)に本多正珍(老中)の所望による「八幡山瀧本坊数寄屋建地割」(414\*)と「八幡山瀧本坊茶立所座鋪共建地割」(414\*)を製作している。文化4年(1807)には、上洛した安藤信成(老中)の所望による「大徳寺真珠庵数寄屋建地割」(395\*)と、阿部正由(京都所司代)が所望した「等持院清漣亭建地割」(462\*)を製作し、さらに文政5年(1822)には松平乗寛(老中)の所望による「瓢箪之間建地割」(495\*)を製作し、江戸に送っている。このように中井家には幕閣や京に赴任した所司代関係者からも茶室起こし絵図の製作依頼があったことが分かる。

起こし絵図は、寛政度内裏の設計過程で、禁裏方に建物の概要を説明する際に、中井役所の棟

梁衆が紙型や木型を製作した事例がある(寛政度内裏『造内裏御指図御用記』)。このように紙製の起こし絵図は茶室のみではなかったが、多くは設計途中の検討用のもので現存しない。茶室以外の起こし絵図で中井家に伝来するのは、「御即位画図」「吉田神社大元宮」「透廊」などであるが、数の上では茶室起こし絵図が多数を占めている。手許に置いて茶道具と同じように愛玩物としたいという数寄者からの需要があったのであろう。

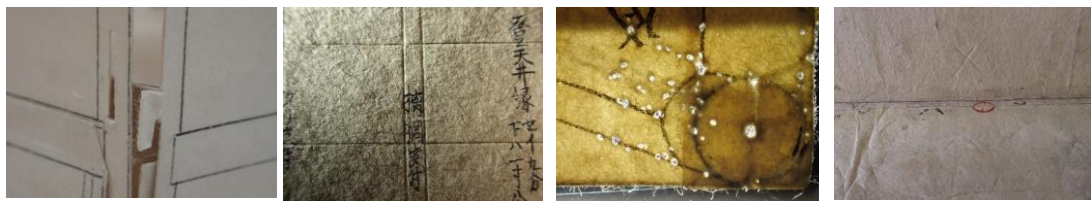
中井家本「茶室起こし絵図」の内容を東博本と比較した新谷昭夫は「誓願寺竹林院数寄屋建地割」(359\*)、「不審庵座敷図」(368\*)や「大徳寺龍光院圍建地割」(377\*)の省略や書き込みの有無から、東博本より中井家本が古く、より原本に近い図と指摘している注1)。加藤悠希も両者は同系統とし「中井家系統」と名付けて同様の見解を示している注2)。一方、中村昌生は、妙喜庵待庵の解説で、東博本と待庵の現状とを比較して、次の間の南側の下地窓の位置が異なり、東側の柱が東博本では1本多く、これが古い姿であると指摘している注3)。ここで、中井家本「山崎妙喜庵数寄屋建地割」(413\*)を含めて比較すると、東博本や現状では、勝手に三重棚が付けられているが、中井家本では壁になっていて、棚とそれを取り付ける方立はない。この棚は、元文3年(1738)成立の『茶湯秘抄』に「一重、下二一重、ツリ竹」と記されていて棚があったことが確認できるので、中井家本はそれ以前の古い姿を伝えている可能性があり、検討の余地がある。このように、中井家本と東博本を比較すると、中井家本が古い姿を伝えていて、東博本はその写しと考えられる。「茶室起こし絵図」の中で、中井家本の資料的価値はきわめて高いと言える。

## (2) 中井家本「茶室起こし絵図」の製作と技法

中井家本「茶室起こし絵図」は、新築の建物ではなく、既存の茶室の精密な雛型である。従って、その製作に際して、まず中井役所の棟梁が現地に赴いて実測調査を行い、野帳を作成する必要があった。中井家本の「妙心寺靈雲院小座敷建地割」(起こし絵図)、「妙心寺靈雲院小座敷金物図」、「妙心寺靈雲院小座敷下絵」(489~491\*)は一連のものと考えられる。下絵は書院の平面及び展開、さらに金物類の詳細を描いている。これらは起こし絵図作成のために実測したときの野帳で、これを元に起こし絵図が製作されたことが分かる。

ところで、中井家本「茶室起こし絵図」は、製作から年月が経って和紙が脆弱化し、また保管状態が良好でなかったことから、部品の剥がれや間違った補修が行われたままになっていた。そこで国庫補助事業によって起こし絵図の保存修理を行うことになり、修理方針として可能な限り製作当初の状態に還元し、後世の補修も歴史的事実として記録に留めることにした。

保存修理が完了した起こし絵図は、和紙の歪やホゾ穴の破損がなくなり、立体的に正しい姿に組み立てられるようになった。「二畳圍建地割」(370\*)と「施薬院圍建地割」(503\*)は、起こし絵図が台紙から外れていたが、痕跡や合印を手掛かりに当初の状態に還元した。保存修理の過程で得られた知見として、①へら跡や野書線、②合印、③針穴など製作技法に関わる痕跡が確認できた注4)。これらは、中井家が製作した他の指図と共通するものもあるが、①は文字や図を描く位置を与えるための線、②は部分図を着脱する際に覚書として記された書き込みで、起こし絵図に特有のものである。③は製作時、または複製を作る際に図を写し取るためにあけられたと推測され、多数の針穴が残るものは、複製を製作するときに針で印をつけて、輪郭や曲線を描いた痕跡とも考えられる。すなわち、起こし絵図の注文があった時、中井家に保存されたものを原本にして複製品を作成したことが想定でき、中井家本のオリジナル性を示している。



(左から右へ、ホゾとホゾ穴、へら跡や野書線、針穴の透過光撮影、合印。写真は坂田墨珠堂提供)

## (3) 失われた茶室・数寄屋の復元

中井家本「茶室起こし絵図」に図面が残っている伏見奉行屋敷小座敷と八幡滝本坊茶立所は現存しないが、それぞれ詳細な彩色部分図が伝存するので、CGを使って内部空間を復元した。

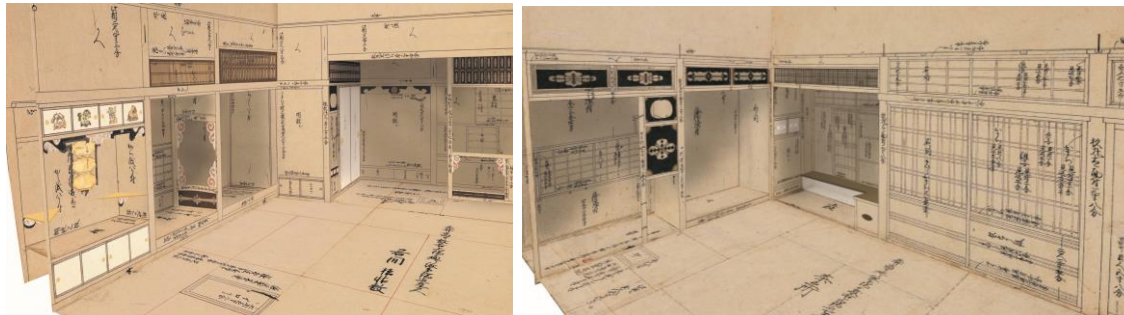
### ■伏見奉行屋敷小座敷の復元(次頁左図)

伏見奉行屋敷は小堀政一の役宅で、「伏見奉行屋敷小座敷建地割」(564\*)は起こし絵図、「伏見奉行屋敷小座敷所々棚并透之図」(473~488\*)は彩色の部分図である。10 畳敷の居間は北寄りにイロリを設け、北面は西端に棚、中央と東端には床を構えている。東に隣接する3 畳敷は中柱を立てて台目切り炉を設け、東面には地袋付の押板を、北面は西に棚を備えている。ここでは CG によって 10 畳の間を再現した。貼紙によると、享保 3 年(1718)に水野忠之(老中)の依頼によって作成されたもので、中井役所の棟梁が写しの作業のために奉行屋敷へ遣わされていた。

### ■石清水八幡滝本坊茶立所の復元(次頁右図)

石清水八幡にあった滝本坊は、寛永 9 年(1632)に客殿、茶室閑雲軒、書院などが整備され、「松花堂(昭乗)と小堀政一相語らひて好み宮れし」(『男山考古録』)と伝えられているが、安永 2 年(1773)に焼失して建物は現存しない。中井家本「八幡山瀧本坊茶立所座敷共建地割」(414\*)は書院の起こし絵図、「八幡山瀧本坊茶立所所々棚透之図」(416~445\*)は書院の茶立所に備えられた棚や透かしの図である。CG によって再現した茶立所の 8 畳座敷は、正面に畳床と 1 畳の点前座が付いて中柱が立ち、点前座の背後に棚を釣り、右手には違い棚と折れ廻り付書院を備えた上段

を作っている。中柱の袖壁や床の小壁には精巧な透かしを施している。この図は本多正珍(老中)が寛延3年(1750)の上京時に注文したとあり、その製作年代は寛延3年を下限とすることが分かる。復元した2つの建物から遠州好みの「きれいさび」の室内装飾をうかがうことができる。



当初の研究計画では、東博本など他の起こし絵図の現地調査を行い、中井家本との比較検討を行う予定であった。また、現存する茶室の現地調査を行うことも考えていた。しかし、緊急事態宣言が発出され、所蔵機関の臨時休館や都市間の移動制限などで、現地調査は断念せざるを得なかった。これらの詳しい検討はコロナ終息後の課題にしたい。

#### (4) 中井役所の棟梁と「茶室起こし絵図」

中井家文書によると、元和8年(1622)の江戸城作事に関して「御すきや善右衛門」なる大工名があり、寛永18年(1641)には中井家配下の大工に、法隆寺西里「数寄屋甚蔵」、方広寺「大仏数寄屋宇兵衛」が確認できる。中井家配下の大工で数寄屋大工が専門化していることがうかがえる。

「大工頭中井家関係資料」の中に「諸方囲数寄屋建地割目録并仕立方仕候名前書 卯九月」(以下、目録とする)の表題をもった冊子がある。この目録は、中井役所が所有する代表的な囲や数寄屋の建地割図(起こし絵図)33通をまとめたもので、1~33までの番号を付し、例えば「(老)一誓願寺塔頭竹林院ニ有之数寄屋 西村伊右衛門」「(弐)一不審庵(千宗左宅ニ有之) 今村文次」と記され、中井家本の起こし絵図にも同じ番号が記されている。「仕立方」の名前は起こし絵図の製作に関与した棟梁衆と想定できる。そこで、仕立方の棟梁別に茶室起こし絵図を分類すると、西村伊右衛門(1、8、12、22。数字は目録の番号。以下同じ)、今村文次(2、7、31)、岡山対馬掾(3、10、33)、今村七重郎(4)、堀内政右衛門(5、9、13、16、24、32)、平岡瀬平(6)、山本寅造(11、25)、岡山宗六(11、21、30)、辻子八十郎(13、17、19、28)、今村上総掾(14)、山本勘蔵(15、29)、石井半右衛門(18、27)、角井忠五郎(20、26)、大東小平太(22、23)、岡島口一郎(23)となり、棟梁は15名に上る。岡山対馬掾と今村上総掾は、中井役所の中で上位に位置する頭棟梁で、「掾」を名乗っている。平岡瀬平は文化6年(1809)の寛政度恵仁親王御殿小指図に名前があり、「大工頭中井家関係資料」の指図・絵図類にも「庫裏」「老間社流レ造り」図が残されている。彼らは中井正紀(7代目。1768—1818)の配下にあった棟梁で、この目録は江戸後期中井役所が保管していた茶室起こし絵図の一覧であると考えられる。なお、目録の「金地院ニ有之囲」(31)と「銀閣慈照寺ニ有之東求堂」(32)は中井家本には欠けているが、東博本に含まれているので、目録作成後に中井家から失われたものと思われる。ただ、金地院の茶室は中井家に「南禅寺塔頭金地院囲絵」(504\*)と題した下絵図6枚が残されており、起こし絵図が作成されたことが分かる。

#### (5) 茶人としての中井家歴代当主

茶室起こし絵図を所持してきた中井家は、江戸時代に京都大工頭を世襲した家柄で、幕末まで10代を数え、初代正清、2代正侶、3代正知、そして3代の後見を勤めた正純が大和守を名乗った。中井家は、幕府関係の城郭、禁裏御所、著名な寺院や神社の設計・監理を担当し、重要な建物は直接、作事(建築工事)を行っていた。中井家歴代の現存建築作品の多くは国宝に指定され、世界遺産に登録されているものもある。

初代の中井正清は、慶長5年(1600)の関ヶ原合戦後から、徳川家の城郭作事を担当している。正清は早くから茶人の古田重然(織部)や小堀政一(遠江守)と交流があった。慶長9年閏8月21日付で古田織部と小堀作助(政一)がそれぞれ中井藤右衛門(正清)に宛てた2通の書状があり、伏見城の小座敷の作事について相談するように求めている(大工頭中井家関係資料)。さらに12月晦日(年不詳)付で織部から正清に宛てた「古田織部筆消息」(同上)も伝来している。正清は徳川家康の御大工として数々の城郭作事にに関わり、茶室や数寄屋の建築にも精通していたことが分かる。

中井正清と小堀政一の2人の関係が分かるのは、慶長12年から13年にかけて行われた駿府城の作事である。中井家に伝来する覚書に駿府城の作事奉行の分担があって、「御天守并二丸御書院、同御数寄や 御奉行小堀作助殿」と記されている。天守とともに数寄屋を共同で担当していることが興味ぶかい。作事奉行を勤めた小堀作助は、駿府築城の功により従五位下遠江守に叙せられた。一方の中井正清は、慶長11年に従五位下大和守に叙任せられており、その後、慶長17年の名古屋城、翌18年の京都御所の造営は、作事奉行・小堀政一、大工頭・中井正清のコンビで行われた。正清は、慶長度内裏の功によって大工としては異例である従四位下に昇叙した。6月19日付の「小堀政一書状」(大工頭中井家関係資料)は、小堀政一が中井正清に宛てたもので「上様御機嫌能被成候」との文言があり、「上様」を徳川家康とすると3人の関係がうかがわれる。慶長20年、大坂の陣によって豊臣家が滅亡し、翌元和2年(1616)4月に徳川家康が没した。正清は家康の廟所である東照宮(久能山と日光山)の造営を担当し、完成後の元和5年に没した。

中井家では実子の中井正侶(1600—1631)が跡目を継ぎ、従五位下・大和守に叙せられた。正侶

は、寛永元年(1624)に始まった二条城の拡張、同時期に行われた大坂城の再建という2つの築城工事で、作事奉行小堀政一の下で大工頭を勤めている。両城の作事が一段落した寛永4年11月、にわかには譲位された後水尾天皇のために院御所の新始が行われた。奉行は小堀政一、大工は中井正侶で、2人は入念に連絡を取って具体的な仕様を決定しており、寛永7年11月に竣工した。

正侶は若い頃から武家としての教育を受け、稲富流砲術の開祖である稲富祐直から「稲富流鉄砲伝書」を授けられ、馬術は大坪流を修め、上田重秀から馬術免除が、兵法では富田流(中条流)の免状が与えられている。一方で正侶は幼少期に北野で能を演じ、飛鳥井雅胤から蹴鞠の八境両分対縮図を伝授され、さらに利休ゆかりの花入「園城寺」を千宗旦より預かり、寛永5年9月8日には小堀政一の三条の邸宅での茶会(『遠州公茶会記目録草稿』)に、江月宗玩、滝本坊と同席するなど、文化・教養を身につけていた。しかし寛永8年に32歳の若さで亡くなった。

正侶に実子がなかった中井家では、正侶の従弟で生まれたばかりの長三郎(後に正知)に跡を継がせ、実父で正清の弟にあたる正純(1594—1654)が後見に立った。『松屋会記』によると、正純は寛永16年3月19日朝、同3月21日晚の茶会に参会し、寛永18年正月10日朝には伏見の小堀屋敷に外向き、片桐貞昌、松屋久重なども同席している。この時期は徳川家光の命による内裏作事(寛永度内裏)が始まり、小堀政一は9人の作事奉行の筆頭で紫宸殿の作事を担当し、中井正純は大工頭を勤めた。8日後の18日に新始の儀式が行われ、正純は従五位下大和守に叙任せられた。中井正純は、御用作事の大工仕事だけでなく、茶会を通して幕府の要人とネットワークを結び、初代、2代が築いてきた大工頭の地位を、3代正知につなぐ役割を果たしたのである。

中井家では、正純の実子の正知(1631—1715)が相続し、承応3年(1654)に従五位下大和守に叙任せられた。正知は『数寄者名匠集』に名を連ねる茶人で、万治3年(1660)序文の『玩貨名物記』は、「本能寺文琳」について中井大和すなわち正知の所有と記している。本能寺文琳はもと朝倉義景が所持した唐物茶入で、義景から織田信長に伝わり、信長が本能寺に寄進したのでその名がある。その後、中井家が所有し、さらに小堀仁右衛門を経て、安永7年(1778)に松平不昧が購入し、現在は五島美術館が蔵している。正知は、近衛家熙より茶入・香合を下付され、茶人の鴻池道徳と交流があり、晩年の元禄15年(1702)に公家の風早実種(1632—1711)から「茶の湯之事」を借用して筆写するなど、茶の湯に造詣が深かったことが分かる(大工頭中井家関係資料)。

中井家は幕府関係の城郭、禁裏、寺社、そして数寄屋や茶室の建築に精通していた。中井家と配下の棟梁が製作する茶室起こし絵図は、茶人を中心に公家や武家から需要があったのである。

#### (6)「茶室起こし絵図」展の開催

2020年2月22日から4月5日までの会期で、特別展「大工棟梁 中井大和守の建築絵図細見」を大阪くらしの今昔館の企画展示室で開催した。この展覧会は、文化庁、独立行政法人日本文化振興会と大阪市立住まいのミュージアム(大阪くらしの今昔館)が共催し、2013年から文化庁の指導監督の下で行われた国庫補助による保存修理事業の成果を展示し、併せて中井家資料の保存修理技術を紹介する企画であった。展覧会の子な展示資料は、「豊臣時代大坂城本丸指図」「禁裏御所一分計絵図」「洛東清水寺惣絵図」など城郭、禁裏、寺社の建築絵図に加えて、妙喜庵待庵、高台寺傘亭、高台寺時雨亭などの茶室起こし絵図を展示した。しかし、国の緊急事態宣言が発出され、新型コロナウイルス(COVID-19)感染拡大防止のため2月29日から臨時休館になった。そこで、展覧会の様子を以下のYoutubeにアップして一般公開した。

<https://www.youtube.com/watch?v=W3HRewWmRgs&t=49s> <https://www.youtube.com/watch?v=5jDoFAHaXQs>

緊急事態宣言の解除によって、2020年6月3日から7月12日を会期として、特別展「和紙の建築模型 建築起こし絵図—茶室と社寺と即位図と」を開催した。この展覧会は、2月末に臨時休館になった前回の特別展を模様替えし、建築起こし絵図に着目して、茶室・数寄屋起こし絵図(中井家所蔵26点+旧中西家所蔵20点)、吉田神社大元宮起こし絵図、禁裏即位図起こし絵図など、保存修理が完了した起こし絵図を公開した。さらに近衛信伊書状、小堀政一書状や中井家歴代の書状(軸装)などを展覧した。これらは、本研究による中井家関係資料の整理を反映したものである。これまでの展覧会では起こし絵図は平置きが多かったが、保存修理を機に、起こし絵図に組み立てて展示した。さらに独立行政法人日本文化振興会の助成金によって、日本語に加えて、英語、中国語(繁体・簡体)、ハングルに翻訳した挨拶文や解説文を置き、茶室起こし絵図の研究成果を日本はもとより海外へも情報発信した。なお、本展に併せて、茶室「蓑庵」(大徳寺玉林院・重要文化財)の原寸模型(竹中大工道具館蔵)を借用し、実物大の茶室を展示した。

中井家本「茶室起こし絵図」は、①京都大工頭の中井家に伝来すること、②一部は製作年代や注文者が判明すること、③中井役所の棟梁衆が起こし絵図の製作に関与していること、④現地調査をした野帳が一部残っていること、⑤中井家の当主は茶人として名を残していること、⑥近年の保存修理によって製作技術を示すデータが蓄積されていることなど、他の茶室起こし絵図と比べると来歴が明確で貴重な資料であることが分かった。建築史にとどまらず茶道史、近世文化史などの分野でも研究が深まることを期待したい。また、和紙の建築模型(日本製ペーパークラフト)として、日本文化の海外への情報発信に寄与することができる。なお、2021年秋に今昔館で開催される「茶室起こし絵図」展(仮称)に図録を刊行し、本研究の成果をまとめる予定である。

<引用文献>

- 1) 新谷昭夫、図版解説、『大工頭中井家建築指図集—中井家所蔵本』、思文閣出版刊、2003。
- 2) 加藤悠希、松平定信(楽翁)収集とされる茶室起こし絵図について、建築史学65号、2015、106-120。
- 3) 中村昌生、妙喜庵待庵解説、『日本建築史基礎資料集成 第20巻 茶室』、中央公論美術出版、1974。
- 4) 清水千尋・佐味義之、起こし絵図の保存修理、『珠々之記 色は匂ほへど』、坂田墨珠堂、2019。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 谷直樹	4. 巻 16
2. 論文標題 京都大工頭中井家2代・正侶について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大阪市立住まいのミュージアム研究紀要	6. 最初と最後の頁 14、25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 谷直樹	4. 巻 17
2. 論文標題 京都頭中井正純について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大阪市立住まいのミュージアム研究紀要	6. 最初と最後の頁 1、12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 谷直樹	4. 巻 2
2. 論文標題 大工頭中井大和守と小堀遠江守	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 月刊茶道誌 遠州	6. 最初と最後の頁 29、32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 谷直樹	4. 巻 3
2. 論文標題 中井家と茶室起こし絵図	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 月刊茶道誌 遠州	6. 最初と最後の頁 30、33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 谷直樹（分担執筆）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 竹中大工道具館	5. 総ページ数 32
3. 書名 大工さん展 江戸時代の職人文化とその伝統	

1. 著者名 谷直樹（分担執筆）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 山川出版	5. 総ページ数 -
3. 書名 『新体系日本史 社会集団史』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------